温泉像艾附うつる牡丹の花　丹鳳

常香の火はもえる歳春　吉原

糸桜松の枝高くもたうきの音　玉虹

馬をも禁下ふ身なれ待なれ　買丼

有明ふ鶯鱗取小屋二三軒　糸

雪と油煙をこもる行燈　雪

大ミふ迷宮かけくらう立ぬ　外

人情をもく嫁ふ　虹

四季と香ふ匂ひぬふ袖櫓　風

少年者て千年狂言の眉　示
三条と四条つゝ別れて人性橋　虹
為しあまりなる医者の根指　井
碁傳記の害ふかつてむごん頁　示
栗の粉餅ふあのす山寺　風
西氣つく自ま陳を性とむしん　井
やりと角力れ初日橋ぬ　虹
まゝなる賛氣と花の三ケの月　風
己の妻荷卵とかす口中用　原

納鯨一著　板のきえか一ト　虹
乞食高てこ居長崎の入口　井
長髪乃同勢性こ死出北旅　示
懐の物くゝれ撫　降　風
鄙先ま飾掛ける菖蒲たか　井
下戸てこ屋山陽ま陽　虹
同帳の井りえハ佛弟なり　風
昨夫の富士ハ昼て出ゝ　原
安達を入まぬこゝろ北斗象物　虹

人なか平　悪乃　炊ひ　井

観音なすすを　雲なの雁　原

雪を　作るもち　玉　鬼　風

櫻　折まも　流石平家の　落　亂　紅

見か　負ぬ　手　みまぬ　井

ひつ　なく　油　ちる　嗟　嗽　九　雪

辛き　目　乃　ち　ち　ち　灰　居の　内　京

知ぬ　道　ひ　付　花　行　井

鬼　形　く　雪　の　聲　紅

初紅ホ伽藍の祈願　旨原
梅咲おそ咲すぎ　坂のきり石　旨線
俳者　素堂　羽黒　雉子穂　翠曽
馬子　桐油　紙　縄　蓑　原
川岡ホ十　そうそう　宿　自　線
きて足　喰　ぬ　深　沾　丈　曽
金堀の　玉　物　買　年の　悔　原
知　蓑　前　落　谷　杖　木　線
古　珠　杖　立　の　巾　曽

二万石　神　主　教　原
嫁　永　穂　そも　岩の山　線
まんうちよ　時　風　出　乃　楫　曽
一日の　雷　門　へ　這　入　人　原
江戸　行　下　の　雷　車　壹　線
花の根　絡　水　流　崖　造　曽
陽　治　て　解　錆　奥　林　原
四　自　ホ　む　ら　渡　立　露　牙
和　教　と　鉛　海　清　水　風　鈴　曽

腰張のかくのぬ壁のいやうに　線
酒いらうまて名醫くすり　牙
麻沙んくすこ出ぬ方の豹の皮　原
二尺ほ切りを惜き藍鼓　源
木茱礎ふ御家此後とひ所　魯
拂の傳式まうふ物怪　原
燈ほ只孟髮の照り合こ　牙
自ほ常牡　窓蓋の傘　魯
高嵯の車も町屋も繩たほこ　線

茶草場ほもんく先生　牙
湖や船傳くもの此山の奥　原
鈍とかほ所ほ越入を　線
御意打もく尾うふふ矢の使　魯
無役ほ小袖ひほ遊い　原
息杖の歩車辺ほまりり　牙
鞍　藝古ふ方んく宿ほく　魯
居弓ほ花嵐を藤ふをを　線
鍵ふ　寝ほ早蔵の毛　牙

谷川や餅かなくの子雑炊　青龍

花さくらかハ勝も高しき　老山

茱萸摘ふ赤手拭を出すもちろく　旨泉

二三百の死拔ふ平なり　小鮮

夕自ふ七十きつれ鞠を蹴る　山

筆ふるく囲碁ハ唐名く　詰

鍬ふ破まさ藤紫の愈ふ　鮮

たゞの縄ゆ沁く宗論　原

月代乃小袖の上ふ結袴　流

年貢の外はなき此秋　山
白髪神に祈る自の國　京
祈治うらに出て槌の稲妻　鮮
友達の寺より清水を汲て　山
茶炊音のうるさき浪人　流
口ずさみ移り香ひるる夏の忘　鮮
徒歩も押へもきぬる浦　京
初雪をりの本移り消る初　流
夕至れば生る唐壺立　山

歌好キ冷泉敬の下ずみ　京
餌郭公鳴て長帝市　鮮
蛍燈て自髪の境きぬ　山
都のちかふ吉京の舟　流
古綿袖の香ずみ一菊流　鮮
鳥鉢こいしき妙付ケ年　京
樓船ら西風落て舟の自　流
楽しき世ずみ飯酒　山
端くも居きあて古い萱の影　京

佛書解らぬ俗人牡蠣を喪
愛しうもの陰とうのみ牡丹二位の山　山
遥の中牡丹名所尋ね　沈
前髪伝負行雲の詩侯うう　鮮
所へ徹の出る夏　狩　原
味噌煮牡丹よう並べ棒の男子　沈
二日の酒を酒二升乗　山
末の城義刻み魚うう花乃庵　原
盥よ前しし蓆牡丹種　鮮

今年の帆柱帰るや仲の夕霧　清秋

[illegible]ふくみて糸[illegible]ふ巾　吉原

[illegible]売[illegible]見[illegible]　山水

家市交書　町[illegible]　古道

[illegible]古物[illegible]　原

[illegible]の雁　秋

谷川を百性　[illegible]　秋　道

大り　[illegible]　山伏　水

傘[illegible]　秋

儀左夫屋舗内ハ七里　原

美の鞠あるき姓空ハあるる色　水

衣御免[illegible]僧の　配膳　道

初茶狩鬼ハ[illegible]面[illegible]有　原

月和初倍[illegible]妹背三絃　秋

むしの聲廓　雑[illegible]鄙[illegible]　道

人姓足　[illegible]足ハ　吟[illegible]　水

桐蓮[illegible]御山の花ハ[illegible]　秋

遠景物茶姓[illegible]大石　原

出雲の杖突足駄 水
結ぶ手の祝ふ地蔵の幣 道
蛙の名を昂筆付ける 原
能ないまりの八十乃腰 秋
敢なしちの巻の呈袋 道
宗根を捨んを伊勢舟 水
小く女来て如千 細り 神 秋
白雲愛を鉢の巻 原
女巻を抑 西まを 善 社 経 水

目洗ひみを侵ふ山路 道
美猫を影も狂ふ獄自 原
炬のあるを粧ふ御車 秋
佛を一世を井ふ取みを 道
流れ下ぬ上を苦 水
分限を井ふ生を花ひ 秋
鼻屎を流ひ瓜世を 原
傘提を雨有ふを花の傘 水
尓乃蛙の雑系鳴ふく 道

塩竈に烟たなびき中の島の霞山

苞に寄せし浦さびの錦　吉原

浜の真砂に梅の群集して清秋

暖の簾古きを店の目に冬野

みち桶の紅葉自　小

夏の雲ふる秋の雲　山

庵の前の蔦の紅の齋の行

女夫石牛に寄ふ山里　秋

手の似ぬ娘の枝も張り出て　山

岸に寝よかたのそを掬れ　京
漕ぐ舟の遠ふ音帽子岩　秋
下ゝ和よ寒ふ下戸は吸酒　浮
傘よ帷子釣こ　まゝり　渠　京
むも柔きき髮風　山
朝起は皆う恨む紙ぬし　雪
磯器や浪寒る持葉ぬく　秋
雲折よ竹忘まい涼別こ　山
雪禅のゝふ自も赤ゝ　京

秋まぬゝ月ふハ足ゝ稲ゝ飯ゝ味　秋
栗　畠かゝ　本陣の塀　浮
木ゝ端ゝ彼ゝ　ゝる　花浮内近　京
嵐と寒ん　蛇よ人　之　山
思　居ゝ出ゝ涼ゝ目ゝ　浮
藁屋は破風ハ柳のゝ　秋
新ゝ火のゝ　ゝ茶は蓑ゝ　山
浮ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　京
女子板ゝ　ゝ男は蓑ゝ　秋

化粧をしゝ雑奏出す音　野

猶引き金襖うつゝ采ばかり　京

楼ゝ嘉肴こまかゝ夕自　山

忘の信卯酒あるとあるうち　野

茅の近き細こゝ川雄　秋

こゝかゝ公ゝ行出行屋　山

江の玉者ゝ地震ばかり　京

松信節常ふ氣ゝ茅ゝ柔血　秋

夢和歌てゝ癖ゝゝ光　野

見拾ふ畑の行ゑの梅の花　五勢
胡蝶より似てまとひ起る蟄　吉原
教居まも妻の主のまとひ茨居る　仝
手を盟ふ　雅乃行ゑ　勢
夕月ふ吋鶯歩行く七ツ半　仝
豆腐炮ふ　鶏まめまとひ　原
拙まとも烏榜紙　約す庭の弁　仝
布施がきふ弁も訓深とり　勢
裏笠ゑふ優まとる度一寸　原

屋まとに拭を籠ふ乃ゑ　勢
吸口も紙ふ包て茶弁當　尓
帙をとめまとに持一冊　勢
沙弥まも国ふ方ふ蕃居て　尓
夜ふ屏風の行き秋風　勢
雲時まとに狩場の赤紅ふ　尓
大國取ふ自とまとに為　勢
苗穂まとに花見を作る二夫と　尓
躑躅ゑ伊ふ茅屋ふ深山　勢

ナ 雪無子足とぐるかふ妻の声　芳
合ましあるを女簡元牡油　京
蜂掃や淀口番を綱を伝く　芳
夕温よ伝くよ堀ぬき　原
厨子カと打て居居さし　芳
伝岡ゑけて寺さ入る武士　原
秋の日は短さ思ふ物漬く　芳
著作方しいちる蘭鉢　原
知てまてるを雪浦の猿の呼ぬく　芳

似る物の中ゑを雛の夫婦ふ　米徳
草庵てはたる妻の牡家　上吉原
花の留き奉く蜂ゑ来ぬく　清秋
門トの並木ハ市の外繁　仝
自の年焼出る塩も移ふ子　京
風のまてゆく雲牡秋　徳
なまぬるくあの菊ゑ花の末ハ　仝
青ハ牡みふ伝やう　仝
赤銀一糸ゑ抱市ハ往登寺　仝

串柿 柳[illegible]の葉 竹筒 仝

景色よく記したる川柱 京

紙と黄と 非人 鼻かむ 仝

所々も皆手 桜の麿 居る 秋

閑江の口 手 拭ける上下 仝

接り新しく ぬし 琵琶の墨 徳

佛のきくじ 指よあまりて 仝

ゆるく歯と雪世の糸 生なる 京

双六 高い 自性 仝

おなじ 竹一井と 和の食 仝

今ハ 変 壇 方 仝

漕ける 千 漕の 仝

特 仝 仝 入 仝

住 仝の 百性 仝 奥 秋

塚 生 猫 盗人 仝

7の紋 社 余 京 灯 森 仝

新 正 る 目 ハ 下 る 鬼 仝

数 明 生 あ 物思 仝

岸はしうひの晩稚と聞　仝

猿ハ面も有ハ白なる　拾水　芝德

萩の祭　匠　五貫目の石　仝

嬉しの雲の油こそ　紫野山陰　仝

歌よりまさる此曲　家　仝

雷の掌を登る大雷　居　仝

坤より後へ占はめてゝ　仝

鶏尾　ゑつこ　冊子　遊人　花鬼　仝

千代のあまつ祝ぶもつぶ夷　仝

むつまじき雛の味噌汁を饒山　狼牙

その桜ちりしを掃く人　吉原

道問へば指さす方に敵もなし　眠皐

能人性の朱ハ馬も喫めり　月門

自手深く考と射付て桂在　示

田の切株一時に寒風　牙

室まで都の孫笠性乳を牙　門

人性清色清廉で　皐

陽を待て寒日ハ丈乃伸く　牙

犠の羊性よハ牛ちまき　示

請まを戻す木陣を立すを　皐

同一化粧性産生門の岸　門

下品下を評ず及ぶ　示

未社の家狼ハ立て居て菁　牙

暮迄き日よ先くる二五の月　門

詳調ふく学ふ門花　皐

巳伏も九十三騎ま妻立て　牙

高ふ面ラの帰（モトヨリ）　示

擾元子妻妊交て巾の解き　皐
ゝゝこの日ゝゝ侍ゝ雲鬼　門
九寸五分衣如ゝて光ゝ　永
居ゝゝゝも小雷鬼の為　牙
大ゝゝ小指ゝ封する大載　門
風ゝゝ作く虎牡鹿物　皐
夕立のゝゝ出ゝゝ嘶の祈ゝ　牙
鳥部御所ゝ侍ゝ毎　永
雲客八幡の参詣ゝ　皐

琴の而望も　於てゝゝ出る　門
賜ゝ家ゝ穂ゝ穂ゝ穂ゝ表ゝ　永
夕日ゝ請て　鶉の羽ゝき　牙
牛飼の女房八喰ゝ　門
行而ゝく　祈ゝ荒神　皐
五月雨ゝ八侍ゝ　綱ゝて　牙
のゝ八ゝ形祈ゝ出物ゝ也　永
花咲てぬまゝ　楓ゝの蓬菜ゝ　紀逸
夫ゝまゝゝ　稚ゝ　門

長閑さや未〻の冬は奥道者　清秋

馬ヨ駆き、なほ佳市て妻を乞　吉原

ゆ富も新ヨ吟ず広き送ゆん　冬野

猩虫の伽世縋ゆゆん　茂陵

涌刻ヨ火なきゆる光の自　示

土蔵へかゆ栗石牡音　秋

かゆゆめヨ猫の剛深人て弟ゆき　陵

碎ゆゆ足ケ如君ゆ屠癌　望

汗ゆゆ糸紋流ゆゆ意ゆゆも　秋

涼床を待しいさのゆ　京
新宅や昔非なく講る古格子　堂
何もしらずすま迄笠人　淺
うへかくも必ずうつ妻牡陽具ゆふ　原
地震あハてて履ぬうくなる　秋
嶋住やる鞠な男ハい主牡穂　淺
幕住やの少ゆ花乃徒也　野
妻而の傘堂や自ず見ゑ　秋
震をあり高聖高人　原

旅宿うら所ゆあるきも平包　堂
一件喰ひも並ム飯州　淺
取ちすあ与辰乃餘舟　京
所な向る寺の大門　秋
夕立牡薊や襟飛々のうら　淺
手ちて見ゆる牛の拍ゆ　堂
又てハ神のうゝ住る此女　秋
見到孫ゑ前髮の武者　京
立少ず棒て嶋て自ゑ新　野

庵一部入しも菊乃面目　淡

秋の石　祇園精舎と浩然　原

酒乃爲まくかすまこと所る　秋

天児ハ猶下ケて来る化粧部屋　淡

身つまる居て　射す油の香　野

涼き暑ハ夕ア涼しくうち呆　秋

載中渾ハ玉乃香　尓

花あまくふかくて紅をぬし　野

まくらに落ます　撥も曲あ　淡

繼ぎ之隅ぬ中ゝ花咲の事　百丈

移乃碁〳〵敲〳〵　春　旨原

梁ゝ遠〳〵と〳〵やゝ〳〵ん　徒牧

雪ぬ馬〳〵〳〵和ゝ　欧　丈

松の自　旅を武士〳〵　刀筒　原

實の入〳〵〳〵稀の押金ゝ　牧

宮寺ゝ北習戸ハ〳〵〳〵雁の羽　丈

ごゝ〳〵の中ゝ谷ゝ指ゝ末　原

樹の下を〳〵〳〵敲〳〵雪ゝ傘　牧

ゝ酒〳〵ゝ胸あ〳〵ぬ恋　丈

起ゝ〳〵白粉の〳〵〳〵横の襟　ゝ

見〳〵〳〵ゝの〳〵〳〵床絲　牧

豆飯ゝ炉ゝ湯ゝ芸ゝ庭作　丈

潮鹹〳〵蔵〳〵井ゝ　ゝ

大名ゝ且那ゝ寺〳〵〳〵　牧

長〳〵ゝの〳〵〳〵白犬　丈

伯特〳〵〳〵ゝ三自ゝ宿　原

玄鈴〳〵〳〵見少ゝ限若　牧

かんぶを調市せあるに巾　丈
猿も休めぬ嵐を高き　京
屋のまゝや百匹立の巣あり　牧
枝持ちる小鳥あるく高し　丈
伊達者なり小車拵来て十寸境　原
色をまゝく俳諧のみ　牧
海山式多飯の振せんをもち　丈
雲前ひしみ米屋めし　原
節目をとしまして春の自　牧

茶ホ色ちゆれ木地の指重　丈
お絮ゐ元下惟さの端女者　原
おまゝ解ゐ云ふのゐる児　牧
人の母祇園の縛馬も見古して　丈
干ゐ太てゝ烟草入出る　原
初物八留中居ゐ喰ゐて嗅すゐ　牧
五人も並ぶ大平ゐ鉢　丈
御本坊橋花松挿まし　原
伺うハ主ゐに見光るなり　牧

既まを四方手を注げて援う那　清秋

夢かな対とあるく生捕の雉　吉原

岩絵見る者もあるを妻の手　仝

行く棟あるの狐　仝

舟ちく罷まもるを自の亭　秋

敲の胴を折うち牡蠣　仝

茶ゆ訪ふ道見那ゆ殺ゆ為　京

住まう苗字ゆ知行まを人　仝

古塀の松よも蝶の巣分うけて　仝

諸方より付ふ猿ひきの町　京
衣〻布晨紙を新しきなるう　仝
いらぬ男山乃島元ゆる　仝
忠心の手代扱切　大西日　仝
住居上あり物売ル秋
車海嵐嗜ム嵐ハ階を竜ル　仝
〻みハなんう〻諸ル　仝
忠と行法寺寺の美ム年　仝
岸の柳ム偶偶游舟　仝

夕陽ハ踏も鳥をいとしん　仝
江湖休人を寺の御ル　仝
いうなる毛栄実なを知の酒　仝
町編屏風もれ島を無ル　仝
〻奈ハ年　武御ル　浅なう　京
〻ル心流う〻ぬ南乗尾　仝
二階口義ての傍ル　仝
ど〻ル〻紙を物新母志　仝
冠を〻見人ま寺る競を組　仝

西をむうまてうき悪のか　秋
ちもの国かゆきれ絶れる　仝
癒りすかゆ　仝
緯の菜白の穴よまてうれん　仝
雨かゆかるあてうあてる　仝
搭鉾も京国行ての家の風　仝
子里かかる口屋も陸　京
忌の粮一升はてよきぞつて　仝
ちきは出て来人長ヵ丙　仝

花寺かなかまて出茶屋の女婦き　百義
絞うて土乃ふ　歪　竹　蜻　吉原
鈴鹿の漢　和も　つう妻　そるて　存義
竹　竹　白　ひも　ちち　立の　聲　百
二ヶ國ヨ　自　澄　ひて　川　蛍　原
菓　引上て　鰻　かて　鯰　存
霧　竹　白　菓の　間々ヨ　沈　夜て　百
福　送　竹　苦　て　病人の　小屋　原
心　ひく　白き　飯　ちて　喰ヨ　見る　存

土　ひく　如　車の　ひ　ひ　上　陽　星　百
寶　炷　も　狩　馬　敬　なて　こて　ひ　原
花　花　きて　ひく　弱　竹　蛍　来　存
屋　紅　架　寺　紙　を　係　小　麓　将　百
田　苅　の　竹　ヨ　畔　乃　竈　尓
寶　所　ヨ　寶　の　鼾　竹　行　なて　存
拾　乃　裁　ら　沈　俺　乃　ひも　色　百
架　て　酒　鈴　も　像　竹　石　佛　原
板　の　茂　菓　日　て　寶　寶　駝　平

ソ 浮雲や客れ数ある数寄屋下駄　百

七夕祭の　馬の合ふ国士　存

虚空も清ふ経よ　擬このけて　原

門よ唄ん此　まつまぶ　寺　百

切髪の先乃光　ゆる　菱　此　釜　存

風よ千話　て　茶合の舟　原

引汲よ大根洗乃遠く来て　百

雪ふ　く　蕾　て　森　此　入　胴　存

両面乃夏　松め　て　菱　舞　壷　平

都も廿日乃清き　撿　校　示

ちりしき荷画の名残たと入　義

石菖白ふ　ふ　ふ　絲　此　月　百

ウ 鰤　鮭　も日　蕾　て　喰　八　風味有　原

舟　あ　て　ゆ　ふ　江の　釜　此　岩　義

月　鮭　ふ　な　ん　の　草履　衣　百

犬追物の　文度　調　ふ　原

芒の春　此　柄よ　結　ふ　か　み　の　草　義

障子　此　日　ち　て　此　用　な　る　四　平

去きぬも猿の面織乃花衣　起月

無分かすに搭あり入桶　吉原

漂抗牡先吉四五丁沙干ふく　吉門

立ぬ敷賀牡ふつ事　社嵐

開札の形くるの　月　示

抗灯の少敷　新の結恰　月

芝生牡望寄ふかく敷女帝花　嵐

何を石生子の哈数児　門

結ふ池い富ふ　月　起結

掃除而ふる毎年の七日　京
國中を示たまつる歳と称する　門
瘧ふるひを棒とあひ唱る　嵐
萩ふて要を要る　牡足の跡　原
恋しやめしるを多　昏を秋　自
古歌の枕をふる　自ふる友　嵐
冨士うつり下りて田を求食　門
すけをなく寺へ投色　網　初穂　自
宅へうつるを這入　時義　京

横子を人分　横人　西の京　門
誰ふ取初て　知番　牡猪　嵐
賀の集ふ家を入てきりふる　京
松の社　改ふ海　ある　用　自
綏　熊治を不仁の　法ふる　嵐
掏　細　引ハ大力もある　門
男をしるふ　ある　乱　髪　自
井も陽をまます　美牡　原　京
銀　屏　ゆけ行自の　歩く　門

秋も火鉢より星霜を経る　氣

出家をこそ侍るべ　和泉寺　京

大工の猶〳〵鉋を見なし　自

ぬけうをこそ侍る耳一樽乃夢　氣

次へ下りて　武御島て　門

鬼〳〵ちよ御代の孫ゝ牙うを　自

猶〳〵まへる丈猶の主　京

調義分格ぬり塔　花の宿　氣

矣以侍る事　国三自　門

一ぞうの二重なる八重撫　常樹

曲みなくはめてまゐ迴状　吉原

門の鬚三日月かゝを寒しん　百菴

猫も兎も眠なり　葵足

物憂く心涼しき竹机　尓

蒲乃簾より風の音　樹

小門の苔敷たる梯樹舟　足

数百乃土民市日通まく　庵

罪もなき遊行柳の背机　樹

乳なる春きてゝ幽霊　原

藪垣や猫もなけい雛も鳴　庵

石川の月ぬ月ぬ沙　足

元船の底ハ呼ぬ蛛の風　原

汁のまゝ〳〵蟹椒　樹

屑籠のくゝもゝ宵てゝ女　足

花乃紙〳〵荷も妾　庵

うかゝ〳〵蛍の尾ぬ立て　樹

削屑乃ぬ歩行上ハ町　原

十

北本彼地解脱を市より雲の神　庵

ひの四方にしるの乃雪の行豆　足

第四に代の庚を為ぶ所を　原

月世桂世　里より　臼杵　樹

塗かゝるを壁より来て写きりく　足

さゝゝきゝ　世巳　未　庵

今ちゝふ國分世碑の分の杯　樹

畑ひゝくゝを清み城出を　原

かつきゝむ陽立世巫女の骨を　庵

群居る地世年一茶　足

古い行御寄殿門のめをさよ　原

原占を小春うゝ　未　樹

逢恋世抗土圭もよりかも　足

吞いをのうゝ浴衣美人　庵

五月雨乃浴川越なきます　樹

屋根まゝ衣詩の芝翁　原

大名世氏子を花世神社　足

清く〳〵筆を清〳〵　庵

[illegible]日暮れ　孤舟
[illegible]　旨原

夏近き妻の[illegible]数を伸とて　君山

何やらいふのうら聲　雅光

岨乃月遥行牛を[illegible]　京

裳[illegible]　母

去り[illegible]の垣ともる火を秋きいて　光

同まてこうまれ手拭の紅粉　山

錫杖や独結ぶ板の雪ふり　舟

呪咀乃壇ゟ踊る人形　京
是屋の茶屋の心ハ廣小路　山
うなり出すを秀衡乃栄　光
引手まを繪分合をる起　澳　京
葷酒分許す山門の雪　舟
ふゝと影ゟ狂歌を望こゝ　光
押もあゝゟ盃に月影　山
啼なゝ来て呼なゝ乃　舟
寄居毛の表を泡崎藥出す　京

白壁も海の一里ゟ近ゝ　山
皇居ハ紅の玉　光
人妻も國のなゝの眉立ゝ　原
痒〳〵習巾を伸る木綿屋　舟
弦孔を孔を無用ゝ　光
小キ丈けも言〳〵虚　山
招薪も家並ゝ笑揚ゝ　舟
鄙乃手乃乃堰を魚釣る　京
きゝなくを喰ハなゝ旅の飯　山

無[illegible]興の宗盛　光
[illegible]も月[illegible]　尓
色淡く秋[illegible]　舟
早稲酒を酌[illegible]　光
刀も邪[illegible]　山
鳥[illegible]笑[illegible]　舟
[illegible]の蓮[illegible]　尓
伊達[illegible]　山
火縄[illegible]　光

禅寺や履の跡掃く妻の音　吉原
桜　こかすなり家根のかすん　素雲
石引の縄取もく霞　也　魯文
組よりて歩行足軽の紋　京
飯四杯汁三盃の新酒　雪
秋八月　法隆寺の馬駕　文
等閑に八幡宮足箱　京
油壮　秀猶小性十人　雪
雁上を一下り乳壮　忠はる　文

起臥ままく妻の腰　京
錆絶長者の家壮　雪
変化ましまし金剛の櫃　文
年の昏の居壮　朝日　原
蟻　ちりぬき安き鳥なし　雲
我者人石板て戻れあまき吾　文
かくもも孝の親壮三味線　原
月の出る一方あまき玄徒　也　雪
蛙　将まれ　手坪の芝　文

ナ
新よりよりの安堂市元牡丹の花　尔
女みなかまたちてつくりたる糸　雲
髪よりあらはれ出し玉櫛笥　文
坂田う紙より宿り舞臺に　原
戸ゝ茶杜湯世間もみな事行て　雲
町ゝいへて巡撫おのゝ　為
赤ものを唐船伝に秋の風　原
樹より新酒乃煮る日杜影　雲
嬰児の新杜篤乃昼の月　文

滝なけるの滝のかゝりける夏　尔
御堂まで同車を待る法の道　雲
旅行より来る乞食星なき　文
下紐に武蔵の寺の徳足して　原
穂末と買ふ身の提　雲
春尺ゝ三月中に若切の出るかゝり　文
稼ゝ鼠乃藝者も開き　原
まゝ紙まいなくゝ雨も泳生て　雲
あらくも暗に佐の小坊主　文

岩鄰湯殿の中なる畫に　如相
谷に寫し奉る　反歌倒まに　吉原
道をそなへ捕の小鮎に和出る　素行
藤小主人に藤ふ　奉乙　相
火著をそなへ初穂の稲を殺の自　原
香氣に高い茶の給と同　行
西のなかをそなへ物を本神者　相
革を合をそなへ住をうふ小刀　原
上帶を端緬かしと接ぬ織　行

御室に見侍る女郎の奪　相
影のなかの門より出入りし　原
形繋がれし行儒女等き　行
神の自沙かけ多れ浅ちう　相
乞巧奠年ゆ牡ほきま　原
秋風や二本五文乃園壹　行
枯ゝ和哉く生　拙　お
花畠蹠跛乃妾ひとりぬ　原
神ゝい蘇牡　羽のきまく　行

雛人も上手牡ゝ周ゝ　お
屁乃屋すゆいよきの骨　京
葉斗ゝ字甲胚文ゝき瘦坐氏　行
萬蓋乃蘊の　幕木ゝ佛　相
京一出ゝ乞金彫傑ゝ為鏡　京
幕角ゝ詩乞近き神拙　行
加壇ゝ格別光る鞍　鏡　相
下為ゝ志の人國の文字猶　京
待金ゝ為為あゝ悪の反　行

宮とゝ門も霞花入る　おの
寺多屋牡蠣を取習ゝ　原
雪法の寄年表の淋る自　行
萩見ても稲ハ免きぬ　御籠藤　相
淋草ハ稲なくさみる特　京
袖しも南京矮　難ハ淡けん　行
雲庵くハ〳〵新へゝけ　おの
此花表かつかゝの能ゝ義の重　行
奢の守らゝ新　水　礼　原

三寸の鮎よ五尺の獺ぞ　立豊

咲かもしろく照る桜　紀影

郭巨が人うゑ山や矣らむ　臺簫

糟踊賣　傘　下　吉原

壺の白茶売の中より　飼兎　影

芙蓉一本も　寂眠る　簫

雲風を度ぶ如ゑ家の鞠　尓

かゝる雲の中くゝ　光

神祈る心の附を孫一出ふ　茗

重盛　朝飯　影

夏柳　澄の糸より結ゝ　光

正平革　牡丹袋ハ頂く　尓

ゑゝ家のあゝ澄の雲　孔

雛も　狩も合歓ぬ　閑　簫

淦柳と一日連ゝ　辰之助　尓

白粉屋　春の日の昏　光

狩酒の入次ぎ　花なれば　簫

閑居を出わゝ申婆ゝ　影

十

万代少へあるべしと法服
我面へ客よりまゐる聟の気　尔
初潮の雲新たにまゐるよ　影
狂言のくるひ　阪中の陽　箇
龍骨車に階のおもて麦の行京色　尔
森きて汐はけるよ庭ゆり　天
人中も尼のもとゆきなき　箇
秋ハかるくるくん　頭点　乳
常ゝ武むらさきの参る松の自　尔

高とも沢中ハぬこのあるあ庭ら　乞
迴快子世を短く点のもて　新
時至るくと汁を煮ら　箇
竹植ゑ夢も賢とゆうから　乞
再鰯のあ新青砥去赤つ　尔
潮へとゝ鯉の縄きのあ面　箇
大吉日や　唖　此一ト云　新
花の空上ゆ作ゑれ屠まら　立志
きのけを細の糸越ゑ　月門